

里山の多様性 の保全と 管理について

「里山」...最近少し気をつけていけば新聞、雑誌、テレビなどで耳にする言葉です。一般的な意味としては「山や森から続く農地があり、山で炭を焼き、また農業を営む地域の風景やその生活の場」と言い換えることができると思います。「ビオトープ」(生物の生活空間)と同じ環境にかかわる人々以外にも徐々に浸透しつつある(という願いを込めて)言葉です。その意味や過去から現在までの姿、また5年後、10年後、自分の目で確かめるのは不可能な何百、何千年後の姿を想定した、貴重な報告や考え方を今回のセミナーで聞くことができました。(大阪支社営業担当・中山香代子)

このセミナーは、兵庫県三田市にある兵庫県立 人と自然の博物館において2月15日、16日の2日間にわたって行われました(私は1日目だけの参加でした)。大阪府高槻市在住の私は、JR高槻から神戸三宮(45分位)、阪急電車に乗り換え、また神戸電鉄に乗り換え、何と24個目の駅「フラワータウン」に到着するころにはすでにヘトヘトでしたが、プログラムの始まる10時には会場はほぼ満員の盛況でした。

第1日目は里山管理の方法ということで、7名の講師の方々がそれぞれフィールドとされている地域の里山の現状や管理、調査結果の報告を聞くことができました。当社大阪支社長の浜田も「東京都における里山管理」の題材で丘陵地公園における雑木林の調査及びモニタリング結果を元に里山管理の現状を発表しました。

私自身はまだこのようなセミナーに参加し、知識を身につけていく段階なので、我社の浜田が演台に立ち発表している姿を見て少し誇らしく感じた

同時に、ますます自分が「一般人だなあ...」と思っていました。

2日目は午後から主に地元兵庫県の里山の現状や環境教育にかかわる里山管理が題材となりました。

聞き終えて思うのは、それ以前には「里山」という言葉の意味を知っていただけだったけれど、その存在の本当の重要性を知る手がかりを得たということです。森林生態学における森のシステムは少し私には難しく、いまだにぼんやりとしか理解できていない部分もあるのですが、ひとつ心にしっかりと感じたことがあります。

それは、人というのは山(先祖から神がつかさどってきた神聖なる場所)そこから続くこんもりとした森や命をささえる川の流れ、そこにある変わらぬ日々の暮らしに原始的な心の安らぎがあることを知らず知らずどこかで気づき、求めているのではないかということです。

都市はどんどん広がっていきます。

私が生まれて育った大阪府吹田市の実家も、かつて裏に山があり、たんぼがあり、豚やニワトリを飼う農家でした。林業を生業とするほどの規模ではありませんでしたが、こじんまりとした里山の生活が十分にありました。特に裏山から続く竹林の質がすばらしく、たけのこの加工業は重要な収入源となっていました。

けれど今の姿はどうでしょう。日本万国博における山や田畑の国による買い上げに始まり日本初のニュータウン開発、ベッドタウン化、鉄道も道路も十分に整備されました。もともとそこに暮らし続けてきた人達の生活はあっという間に限りなく文化的に快適になりました。私の記憶の中にある小さな里山生活をそこにを見つけることはできません。たった30数年のあいだに...

それならすべて昔がいいのか、過去に回帰すればいいのか...というわけではありません。高度成長時代がもたらしたすべての事象を善と悪に分けてみたり、これまでに至るプロセスを議論することは、また別の機会に譲りたいと思います。

ここ数年、私たちが生きて行くために最も重要な環境に関するこのような催しが専門家だけではなく市民レベルまで広がってきているようです。今は「価値観」の見つめなおしの作業中ではないかと思うのです。その作業に参加できるということの意味や責任を考え、自分にできることは何なのかを見つめつつ、この仕事とかかわっていきたいと思います。

価値観の見つめなおし中

プログラム

2月15日(土) 里山管理の方法

1. 里山の現状～里山の群落分類について～...武田義明(神戸大学発達科学部)
2. 池田炭の生産が続く北摂の里山の現状.....赤松弘治(里と水辺研究所)
3. 東京都における里山管理.....浜田拓(地域環境計画)
4. 大阪府における里山管理.....木下睦男(大阪自然環境保全協会)
5. 神奈川県における里山管理.....中川重年(神奈川県森林研究所)
6. 兵庫県における里山管理(1).....打浪久淳(兵庫県農林水産部林務科)
7. 兵庫県における里山管理(2)...追跡調査結果 山崎寛(神戸大学大学院)
8. 総合討論

2月16日(日) 環境教育としての里山管理とニュータウンにおける里山管理

1. 神戸市における環境教育としての里山管理.....高石悟(神戸市環境局)
2. 宝塚市中山台における植生管理...原田玲似子(中山台ニュータウン自治会)・服部保(県立 人と自然の博物館)
3. 三田市フラワータウンにおける里山の現状...矢倉資喜(ひょうご環境創造協会)
4. 三田市フラワータウンの里山の方向性...石田弘明(県立人と自然の博物館)
5. 総合討論

かつては炭の生産のために繰り返し伐採(関西では7～8年周期)されていた里山林。近年、里山林が伐採や落ち葉かきもされず手が入らないまま放棄され、常緑樹が多く侵入し種の多様性が低くなっているとよく言われます。種の多様性は本当に低くなっているのでしょうか？種の多様性が低くなれば昔のように林を伐採しなければならないのでしょうか？今回のセミナーではこれらの疑問にいくつかの答えが示されていたと思います。セミナーでの発表を紹介しながら私なりの考えを少し述べてみたいと思います。

(大阪支社自然環境調査室 石山麻子)

伐採が及ぼす影響

赤松氏(里と水辺の研究所)は現在も炭の生産の続いている北摂地方で伐採直後から放棄された林までをいくつかのステージに分け、植物の種組成(種の有無)種の多様性(出現種数)にどのような違いがあるか調査を行っていました。調査の結果、伐採後のステージから放棄され長期間経過した林まで共通している種が多かったこと、出現種数も大きな差がないことを明らかにしていました。しかしながら、伐採後の年数が短い初期のステージには草原性、林縁性の種が多く含まれていること、種の有無には違いが認められないものの種の被度の違いはあったことが報告されていました。

このことは、管理を放棄したら種の多様性が低くなるとは一概に言えず、種の多様性を維持するには昔ながらの伐採するという管理が必要であるとは限らないことを示しています。少なくとも今回の調査が行われた林齢が30数年の林までは種組成に大きな変化がないので早急に伐採しなければということはないと思います。ただ、種によって管理を放棄されたことによる影響を受けやすいものとそうでないものがあり、それは、それぞれの種の繁殖様式や個体群維持のシステムと密接な関係を持つと考えられます。

例えば、木本類は個体の寿命が長く、影響は受けにくいと考えられますが、林床の草本類、特に種子繁殖によってのみ個体群を維持している種は開花、結実をして種子生産を行い、種

子の発芽がなければ種の個体群は維持できないので環境の変化により敏感であると考えられます。このような種は管理を放棄され上層木の陰になると、開花、結実をしなくなり、さらに、たとえ種子が散布されても落葉層の堆積により発芽できない等の影響を受けると考えられます。これは現在生育している個体が枯死すると、新たな個体の供給がない状態となり個体群そのものが消滅すると考えられます。

このように種によって影響の受け方は異なるので、影響の受けやすい種群を抽出し、その動向によって林の状況を判断するという方法も今後検討され行くべきと考えます。

高木環境林管理

山崎氏(神戸大学大学院)は現存する高木層は伐採せずに、低木層に密生するヒサカキ等の照葉樹、草本層に密生するネザザ類を選択的に伐採するという管理(「高木環境林管理」と名付けていました)を提案していました。さらに、「この管理が里山林の新しい管理方法になるか」というテーマで「この管理で夏緑広葉二次林として維持できるのか？」という調査、検討を行っていました。

調査の結果、「管理直後に侵入する実生の中心は夏緑広葉二次林要素の木本種なので夏緑広葉二次林として維持していく可能性は高まった。」と結論づけています。

しかしながら、これについてはかな

新しい時代の関わり方を

り疑問！と思いました。なぜなら、夏緑広葉二次林の主要構成種はコナラ、クヌギ、アベマキ、クリ等と思われませんが、調査地点7地点のうち管理前に実生の生育が認められず、管理後に実生が確認されたのはクリが2地点、コナラ、アベマキがそれぞれ1地点です。特に、コナラの優占する林でコナラの実生は確認されていません。この結果からだけでは調査した林がコナラ等の優占する夏緑広葉二次林として維持すると判断は出来ないと考えます。かつての里山の管理では林を維持する方法として萌芽更新(高木層の優占種を伐採し萌芽させて林を維持する方法)によっていました。一方、「高木環境林管理」では実生更新(高木層の優占種の種子が発芽し成長し林を維持する方法)によって林を維持します。「高木環境林管理」が夏緑広葉二次林を維持するのに有効であると今回の調査結果からでは結論付けられず、今後さらに多くの林分での調査および種子がどのように供給され、どのように発芽し、定着していくかを明らかにすることが必要と思います。

とはいえ、「里山林が種の多様性を保ち、かつての里山林らしくするには、かつて行っていた伐採が一番だがそれは経済的に無理」という大きな課題に「高木環境林管理」という新しい管理方法で新たな方向を示した事は大きな意義があると考えます。

また、里山林はかつては生産の場でしたが、現代では環境を良好にする場であり、かつて生産のために伐採していたのと同じ方法で管理するのは困難で、新しい管理方法が必要ではという発表も興味深く思いました。

今回のセミナーは「里山」という言葉をキーワードに、特に、管理という側面から様々な論議が行われ、有意義だったと思います。かつての管理方法に固執するのではなく、新しい時代の新しい里山林との関わり方を模索しなければと痛感した一日でした。